

(別記様式第 5 号)

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報 告 番 号	博 (生) 甲 第 5 1 号	氏 名	平 井 良 夫
学 位 審 査 委 員	主 査 西 ノ 首 英 之 副 査 川 添 強 副 査 山 口 恭 弘 副 査		
・ 論文審査の結果の要旨 平井良夫氏は、平成12年3月水産大学校を卒業、平成14年3月長崎大学大学院生産科学研究科博士前期課程水産学専攻修了、同年4月博士後期課程に進学し現在に至っている。後期課程においては海洋生産科学を専攻し、所定の単位を修得の後、平成16年12月、学位論文「有明海小型底曳網の漁業管理に関する研究」を完成し、4編の参考論文を添え、長崎大学大学院生産科学研究科教授会に博士（水産学）の学位を申請した。 長崎大学大学院生産科学研究科教授会は、これを平成16年12月16日の研究科教授会に付議し、受理を決定後、上記の学位審査委員を選定した。審査委員は、主査を中心に論文内容について慎重に審査し、公開論文発表会での発表を行わせると共に口頭による最終試験を行い、論文の審査および最終試験の結果を平成17年2月17日の研究科教授会に報告した。 本論文は、有明海における各種多様な漁船漁業の中で漁業生産量の最も多い小型底曳網漁業の管理の在り方として、水産資源の保護と持続的有効利用および漁家経営の合理化・省力化を目的として研究を行ったものである。また、漁業管理対応型の漁具として現在の小型底曳網漁具の改良を行い魚種およびサイズ分離選択網を考案開発しその性能評価まで研究を行った。 本論文は、8章から構成されている。 第1章は緒言で、本研究の背景と意義・目的および構成について、さらに関連する既往の研究について述べた。 第2章では、商業船の漁獲統計値には混獲・投棄量は表れないため、混獲・投棄の実態は不明である。そこで、小型底曳網漁業におけるこの混獲・投棄の実態について、標本船と商業船との漁獲特性の同一性を検証したのち、利用種、未利用種も含めた総漁獲量に占める混獲・投棄の実態を明らかにした。 第3章では、第2章の利用種に的を絞り、利用種の出荷サイズ基準未満の小型魚の混獲・投棄の実態を明らかにした。特に本漁業での漁獲量第 1、2 位を争うメイタ			

ガレイの投棄割合の高さが示され、本種の資源管理を最優先して確立する事が最重要課題であると結論付けている。

第4章では、前2、3章の現状をふまえて、メイタガレイの出荷サイズ基準以上のみを選択的に漁獲する、網目拡大を想定したメイタガレイに対する適正な目合と適合縮結を明らかにした。

第5章では、資源管理方策として、網目拡大（網目規制）を実施した場合の現商業船の漁獲物への影響について、種選択性および水揚げ漁獲量について検討し評価した。その結果、本漁業では網目規制のみによる漁業管理方策は漁獲量の大幅な減少を伴い、困難であると判定した。

第6章では、以上の結果を基に、有明海底曳網の漁業管理方策として、水揚げ上位2魚種分類群（小型エビ類とメイタガレイ2種で全体水揚げ量の50%を占める）に対する魚種とサイズの分離選択漁獲を目的とした網を考案開発した。

第7章では、開発網の分離漁獲性能評価と漁獲実態を解析し、現在の網との比較も検証し、水揚げ量の大幅な減少もなく、資源の保護と有効利用ならびに漁家経営の合理化・省力化に大きく寄与する事を科学的に明らかにした。

第8章では、各章の成果を総括して結論とした。

以上のように、本研究は有明海底曳網の漁業管理について、最終的には底曳網を開発し、その性能までを評価し、漁業管理の基本である速効性、確実性、有効性を満足した漁業管理方策を確立した。本研究は海洋生産科学の発展に寄与するところ大であると高く評価できる。

生産科学研究科教授会は学位審査委員の報告に基づき審査した結果、本論文は博士（水産学）の学位に値するものとして合格と判定した。